佳作（阿礼特別賞）

神在月の十神山で

鷲野　亜紀

島根県

「十神山では今、神様が休憩されてるから、登ったらだめなんだって。」

長女が小学校４年生頃のこと、学習発表会の練習をしていた十月に、こう言った。

十月は「神無月」というが、八百万の神々が出雲に集うとされるため、出雲地方ではこれを「神在月（かみありづき）」と呼ぶ。私が嫁いできた、ここ島根県安来市も出雲地方である。長女の通った安来市立十神小学校は地元の「十神山」の名を取った小学校である。

安来の民間伝承では、神在月になると、神様達が出雲に集まられる途中に、十神山で休憩されるので、この時期は十神山に登ってはいけない、というらしい。私はこのとき初めて知った。

長女たちはその年の学習発表会で、神在月の十神山にお立ち寄りになった様々な神様をお面にしてかぶり、伸び伸びと楽しんでいた。

古事記に登場する神様達は、人間味にあふれ、生き生きとした感情を備えた存在として描かれている。また、そうした神様達は太陽や水、土、火といった人間を取り巻く自然と一体化し、人間の日常生活にとけこんでいるように感じる。

太古の人々は、人知の及ばない圧倒的な自然の力を感じ、その中で暮らす自分たちをどこか遠くから見守り、自分たちの行為の是非を判断している、「自然の良心」のようなそんな存在がいるような気がしていたのではないだろうか。

神様を敬い、自分たちの生活の中に神様を組み込むことで生活を律し、季節の移り変わりを楽しんでいたに違いない。

春になれば中腹に桜の帯ができる十神山は、子供たちにとってふるさとの子供時代を象徴する大切な山である。その十神山に神様達が立ち寄って休憩されてから出雲に赴く、という言い伝えに、故郷を愛する人々の心と、自然としての神様と共存しようとする先人達の深い叡智を感じるのだ。十神山のそばを通るたびに、神様の気配を感じる神在月である。